

Hospice Palliative Care Japan
日本ホスピス緩和ケア協会
事務局ニュース

No.15 2006.2

事務局：〒259-0151
神奈川県足柄上郡中井町井ノ口 1000-1
ピースハウス病院内
TEL (0465)80-1381 FAX (0465)80-1382
Web Site <http://www.angel.ne.jp/~jahpcu/>
E-Mail jahpcu@angel.ne.jp

2006. 2. 8 再発行

2006年度年次大会

2006 年度年次大会は、松山ベテル病院の森 洋二先生を中心に、下記の通り開催されます。
参加申し込み方法等の詳細につきましては4月にご案内いたします。

期 日 2006年 7月 15日(土)・16日(日)
専門委員会を7月14日(金)に開催

場 所 愛媛県民文化会館 (<http://www.ecf.or.jp/>)
〒790-0843 松山市道後町2丁目5番1号
TEL (089)923-5111 FAX (089)923-5112



◆ 年次大会プログラム(予定) ◆

1日目

基調講演 「これからのホスピス緩和ケア」
講 演： 志真 泰夫
(筑波メディカルセンター病院 緩和医療科診療部長)

分 科 会 A. いかにケアを評価するか
B. いかにホスピス緩和ケアを教えるか
C. いかに切れ目なくケアを提供するか
D. なぜホスピス緩和ケアの研究が必要か

日本ホスピス緩和ケア協会 総会

2日目

看護師長会
ソーシャルワーカー部会
フォーカスマーケティング
「質の高い緩和ケアを日本全国に
普及させるために取り組むべき課題」

※ 1日目の夜に懇親会を予定しています。

メッセージ

2006 年度年次大会 大会長 森 洋二
(松山ベテル病院 在宅部部長)



2006 年度年次総会の大役を四国の松山でお引き受けしました。事務局の有能な皆様に全幅の信頼をおき親船に乗った気持ちであります。

四国は高知県を除いて、ホスピス緩和ケアの施設が1県1箇所とさびしいのですが、2006 年春から四国がんセンターの緩和病棟がはじまります。なかなか軌道に乗らなかった四国支部の活動に、総会をきっかけに花が開き、四国のホスピス・緩和ケアが地域に根ざした運動にまで発展するように念じております。

松山ベテル病院は155床の小さな病院ではありますが、発足当時(1982 年)日野原先生や柏木哲夫先生が欧米のホスピスを日本に紹介され、浜松聖隷三方原病院、淀川キリスト教病院にホスピス開設をという気運に大いに啓発され、ホスピスマインドで運営される病院を目指してきました。2000 年4月によやく

72番目の施設として承認されホスピス病棟を開設しました。ここに至るまでには紆余曲折がありましたが、一人の入院患者さんの熱い祈りが叶えられたのであります。その方は癌の患者さんではなく、神経難病を長く患われた川口武久さんです。川口さんは32歳の時千葉県でALSになられ、病院を転々とされ、民間療法も色々試み、しかし徐々に身体が不自由になっていくなかで仕事をやめ、故郷の三重県に戻られました。ある大学病院の外来で、診察机の上を開けてあったカルテを見、はじめて自分の病名をしりました。子供がなかったこともあり離婚され、二回の自殺に失敗。ちょうどその頃日本を訪れたマザーテレサの、死にゆく人に寄り添っていく愛の姿に強く感銘し再び生きていく決心をし、そしてホスピスを目指して設立したばかりの松山ベテル病院に遥々三重県から入院されました。発症から5年の平均余命のALSを抱えて21年の間、そしてそのうち13年をベテル病院で生活されました。その間に大勢の同病の患者さんを訪ね、はがきを書き、本を3冊出版されました。患者家族に、医療関係者に呼びかけ、厚生省にも働きかけ、日本ALS協会を設立されました。川口さんが日本ALS協会の初代の会長を勤められました。

川口武久さんが亡くなられて10年目になります。彼ののぞみはがん末期の患者さんだけでなく、死を目前にして一日一日苦痛の中で生きておられる全ての患者さんに、緩和医療そしてホスピスケアを受けられるようにして欲しいということです。HPCJが益々緩和ケアの質を高め、活動の幅を広げ、社会に深く根付いていきますように、その一端を担って努力していきたいと思っております。



■ 理事会報告 ■

日本ホスピス緩和ケア協会事務局 松島たつ子

2005年12月3日(土)、午前の専門委員会(評価、教育研修、あり方検討、広報)に続き、2005年度第2回理事会が開催されました。以下に主な内容をご報告いたします。

会員状況：

2005年7月の年次大会以降、会員の入退会があり、A会員は緩和ケア病棟が9施設増え、153施設(2890床)、緩和ケア診療加算届出受理施設として5施設(B会員からA会員への移行)、B会員は65施設・団体、賛助会員は85(法人24、個人61)となった(理事会以降の入会も加えた2006.1.1現在)。

年次大会と支部活動：

年次大会はビジネスミーティングとしての特性を持たせ、会員施設のスタッフを含めた相互の交流や教育は支部活動に委ねていくことが再確認された。これにより2006年度年次大会は、協会として「これからの緩和ケアのあり方」を示していくためのステップとなるような会とすることとなった。今後の支部活動のあり方や支部助成金などについては、次頁のあり方委員会委員長 末永先生からの報告をご参照下さい。

ケアの質の維持・向上と質の評価：

緩和ケア病棟数の増加、緩和ケア提供形態の広がりなどを受けて、ケアの質の維持・向上が協会の取り組むべき重要課題となっており、評価委員会では、「ホスピス緩和ケアの基準」を見直し、提示していく作業を進めてきた。この基準をもとに「ホスピスケアの評価指針(病棟用)」を作成しており、A会員の緩和ケア病棟における試用結果を受けて、2006年度の年次大会には完成版を配布できる予定である。今後、緩和ケアチーム、地域緩和ケアチームの評価指針の作成も予定している。また、評価委員は、(財)日本医療機能評価機構による病院機能評価の付加機能(緩和ケア機能評価)のサーベヤーとして協力しているが、評価内容の見直しの時期にきており、その作業にも関わっていく必要性が確認された。

なお、「診療報酬改定に向けた緩和ケア検討プロジェクト」ワーキンググループを中心に、緩和ケア病棟入院料および緩和ケア診療加算に関する施設基準の適切性について、関連施設を対象に質問紙による調査を実施し、調査結果を受けて、今後、協会としての考え方を厚労省に伝えていくことも確認された。

教育研修：

2006年度の会員向けの教育セミナーについて、9月30日・10月1日と3月3・4日の2回開催を予定している。その他、教育研修委員は、看護管理者教育、医学生・研修医向け夏期セミナー、医学部教員セミナー、医師向けカリキュラムの作成、ソーシャルワーカーの教育プログラム作成を、(財)日本ホスピス緩和ケア研究振興財団の助成を受け、また、日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会、大学病院の緩和ケアを考える会などと協力しながら活動を進めている。

国際交流：

本協会はアジア太平洋ホスピス緩和ケアネットワーク(APHN)の一員として活動に参加し、協力していくことが再確認された。具体的には、緩和ケアがまだ充分進んでいない国（モンゴルなど）からの連絡相談を受けることが期待されている。また、世界ホスピスデーに、今後は協会としても取り組むことなど、国際交流の必要性が確認された。

■ 2007年度年次大会 ■

2007年度は、愛和病院の山田先生を中心に、長野県で開催する予定です。

日 時：2007年7月14日（土）・15日（日）

場 所：ピックハット（長野県長野市）

大会長：山田 祐司（愛和病院 院長）



2007年度年次大会
大会長 山田 祐司氏



■ 支部活動 ■

「協会本部と支部の役割について」

あり方検討委員会委員長 末永和之

2005年度の年次大会で各支部の立ち上げをお願いいたしました。支部設立の目的は、支部内の会員同士が活発に交流を深め、情報、経験、問題などを共有し、より良い緩和ケアの確立に取り組み、並びに会員が各地域で、自施設に近いところで研修・教育を受けることにより、ケアの質の補填を図ることが大きな目的です。

研修については教育研修委員会と連携をとり、本部が年間計画を提示し、支部で研修会を開催する。提示されたテーマに対しての実施は支部に任せ、独自で勉強していくことで施設間の問題点の共有や課題の達成につなげていただければと思います。たとえば、同一テーマで年3回開催して多くのスタッフに研修していただくこともよろしいかと思えます。各支部のレベルに応じ要望があれば本部から講師を派遣することも考慮致します。また、統一した教育レベルを保つためには、各支部の研修担当者の教育が必要と考えられ、教育研修委員会が開催されているセミナーを、各支部教育担当者向けのものとする方向で検討することになりました。

支部研修の一環として、今年度以降、STASワークショップは各支部にて開催していただければ協力したい旨、志真理事より提案がありました。開催に関する作業は、全て東京大学の関係者が担当されます（教育研修委員会、河委員）までご相談してください。

本年度は支部活動発足の為に支部助成金は一律20万円でしたが、次年度より各施設より納入される年会費の20%を支部助成金に当てること、施設数が少なく、合計金額が20万円に満たない場合は20万円を支給することになりました。これにより、支部会費はとらないことになりました。運営に関して、参加費などは支部に一任致します。

これからの超高齢化社会において、がん患者も増大し、がん治療の多様なニーズの中でホスピス緩和ケアのはたす役割は極めて重要です。わが国のホスピス緩和ケアが特殊なものではなく地域に密着し、広く一般市民、医療機関に受け入れられることが大切です。そのために支部活動は地域のネットワーク確立のためにも、その中心としての働きが必要となると思います。

各支部からの活動報告



北海道支部

北海道支部 代表 柴田 岳三
[日鋼記念病院 緩和ケア科科长]

日本ホスピス緩和ケア協会 2005 年度年次大会のワークショップでは、支部活動の促進が図られるべく、さらには地域ごとに支部立ち上げの促進が図られるべく、地域ごとのミーティング形式がとられた。2003 年度年次大会を機に、北海道地区はすでに支部としての活動を始めてはいたが、このワークショップが私たちの抱えていた諸問題を改めて考えるきっかけとなった。下記の活動目標が討論され、北海道に持ち帰られて継続されている。

【活動目標】

北海道支部年次大会への参加者の拡大、地域での活動のあり方、委員会組織構築の検討

【会員の増減】

2005 年度に A 会員が一施設増え、A 会員 10 施設、B 会員 6 施設となり、早速支部活動への参加を呼び掛けることになった。また役員として活躍されてきた A 会員の時計台病院古川勝久先生と B 会員札幌鉄道病院小林先生がそれぞれの病院を退職された。



【年次大会】

2006 年度の北海道支部年次大会開催では下記のように日時と会場が決定されたが、特別講演、分科会の内容については検討中である。

日時：2006 年 5 月 20 日（土）

会場：札幌コンベンションセンター

【ニュースレター】

支部発足時から毎年発行しているニュースレターも第 3 号を何とか年度内に発行にこぎ着けたいと頑張っている。

東北支部

東北支部 代表 岡部 健
[岡部医院 院長]



2005 年 11 月 20 日に第 2 回東北支部会を開催した。以下について話し合われた。

現在、宮城県内で年間 5000 人以上のがん患者が亡くなっている。この患者の受け皿をどこにどう作ることが重要で、現実在宅と言う名で放り出され、行き場を失っている患者が大勢いる。今後の高齢社会を支えるため、在宅のホスピスケアの整備、一般病棟で亡くなられるがん患者の緩和ケアサポート活動などは、早急に行わなければならない状況である。

日本ホスピス緩和ケア協会では、施設ホスピスだけでなく、在宅ホスピス、緩和ケアチーム等の多様なホスピス形態を受け入れる必要性を感じているが、知識や技術のばらつきが大きくこれらの活動について、どのような基準をもって会員として受け入れていくかが今後の課題である。

介護保険の改正で 40 歳以上の介護保険の利用が可能となることから、在宅で生活を支えた上で症状コントロールをしていくため介護系との連携が重要になる。

在宅ホスピスの重要性ばかり挙げられているが、施設ホスピスの更なる充実も重要な課題である。

東北支部会は同じ土台で教育、研究をするためにアセスメントの一定化、共有を行う。一例として、データベースの構想では共同作業により入力システムの検討を行う。基準に沿った医療水準で活動を行うことを入会承認の条件・基準としていく。また、スタッフ育成のための研修会、事例検討会、共通の問題について勉強会を開催する。連絡、質問、会員相互の意見交換等のためのメーリングリスト作成。また、支部会で情報共有のための勉強会、事例検討会等を容易に行い、かつ時間、旅費交通費の削減ができるテレビ会議システム導入を検討している。

今後の東北支部会の方向性として、ソーシャルワークを地域連携の中心とし、どのような在宅ホスピス、介護系ホスピス、施設ホスピスが患者ニーズに適するのかを明らかにし、今後の地域ケアのあり方を検討したい。



関東甲信越支部

関東甲信越支部 幹事 志真 泰夫
[筑波メディカルセンター病院 緩和医療科診療部長]
関東甲信越支部 広報 山田 祐司
[愛和病院 院長]

当面支部は分割せず、これまでのネットワークは継続

◆自主的な交流は継続

2005年7月9日、年次大会総会後にアルカディア市ヶ谷で関東甲信越支部会議が持たれた。すでに関東甲信越地区では、自主的な交流やネットワークが持たれてきた。支部会議で報告されたものでは、西東京（7施設）、神奈川（8施設）、甲信（5施設）、茨城（3施設）は、それぞれ地域の自主的な交流会として活動が継続している。これらの自主的な交流、ネットワークについてはそれぞれの歴史的な経緯があり、継続して活動を行うことが確認された。名称については、日本ホスピス緩和ケア協会関東甲信越支部の名前を使用するかどうか（たとえば、関東甲信越支部の次に甲信ネットワークなどの名称をつける、あるいは協会の名称は使わず従来のままでなど）それぞれのグループで検討して、報告してもらうこととなった。ただし、自主的な交流を継続する場合、日本ホスピス緩和ケア協会加盟施設が中心となって会議やセミナーを持つ場合、新たな会費徴収、製薬企業等のスポンサーの援助は受けないことが望ましい、という申し合わせをおこなった。支部以外の名称については、ネットワーク、交流会、連絡会などが候補に挙がったが、それぞれ持ち帰って検討することとした。

◆支部は分割せず

日本ホスピス緩和ケア協会関東甲信越支部は、当分の間、支部として65施設（A会員45施設）で運営する。支部の役割として、交流親睦、情報交換、教育研修の3つが考えられるが、支部の構成施設数が多いため、当面支部の役割を「教育研修」に限定し、今後支部としては教育ワークショップを計画することとなった。

幹事は、加盟施設が多いので、理事選出施設（7施設）に加えて、こばり病院（新潟、水戸医師）、聖ヶ丘病院（東京、三枝医師）をお願いする。事務局は、筑波メディカルセンター病院（茨城、志真理事）に置くことが決まった。広報は、愛和病院（長野、山田理事）が担当する。

東海北陸支部



東海北陸支部 代表 井上 聡
[聖隷三方原病院 ホスピス所長]

東海北陸支部は、今年度はまだ具体的な活動はしていないが、2月18日(土)に交流会を名古屋で開催する予定である。

今後の活動目標は、中・長期としては、支部内会員同士の交流の場、情報交換の場としての役割、緩和ケア従事者への教育的役割、地域における緩和ケアの啓蒙・啓発、地域ネットワークの構築であり、短期としては、支部内会員同士の交流を深め、情報・経験・問題などを共有し、よりよいケアの確立に取り組むことである。具体的には、各施設のケア内容の紹介、スタッフ教育、スタッフのメンタルケア、医師・看護師不足、病棟運営、入退棟基準、院外からの研修受け入れ体制、地域性を考えたシステムなどを考えている。来年度は交流会以外にSTAS研修会の開催を予定している。(日程は未定)

また今後は、年一回の総会開催と教育講演、分科会（職種別、テーマ別）、症例検討なども考えていく。



近畿支部

近畿支部 事務局 池永 昌之
[淀川キリスト教病院 ホスピス長]

近畿支部としては、昨年の年次大会の分科会において、①各県より2名の幹事を決定する。②その他の研究会と区別するため、近畿ブロック会と命名する。③緩和ケアを実際に行っていく上での具体的な悩みを話し合える会にする。④年に1回、11月下旬の土曜日午後、各県からの交通の便が良い会場で、参加費を無料で行う。⑤主な連絡を簡便・安価に行うため、会員施設の代表者2名によるメーリングリストを作成する。という5点を決定した。上記に従い本年度は、高槻赤十字病院緩和ケア病棟長の岡田圭司先生と私が担当幹事となり、11月26日(土)15時~18時に大阪コロナホテルにおいて、第1回近畿ブロック会を開催した。

近畿支部のA・B会員施設に対し、各施設5名までを定員として参加者の募集を行い、最終的には25施設、73名(医師20名、看護師44名、その他9名)の参加があった。

まず開会挨拶の後、事前に行った各施設の運営に関するアンケート調査の結果を私が報告した。その次に、担当幹事の岡田先生と昨年新しく開設されたガラシア病院ホスピスの高浪看護師長より、現在の施設の現状と課題について15分間ずつ報告して頂いた。

その後、事前に参加者の希望を確認し、3グループ(①症状緩和に関する問題、②患者・家族とのコミュニケーションに関する問題、③病棟運営に関する問題)に分かれ、分科会を行った。各々のグループではそれぞれの施設が持つ問題が報告され、それに関する他施設の工夫などが意見として出され、学会などでは聴けないような内容にまで広がり有意義な討論となった。

最後に、全体報告会において分科会での討論内容を各参加者で共有し、閉会の挨拶となった。幹事会では引き続き同様の形式で年に1回、ブロック会を開催することを決定し、来年度は2006年11月18日(土)に、六甲病院の安保博文先生と東神戸病院の佐井利恵子看護師長が担当幹事として準備を行うこととなった。引き続きこのブロック会が各会員施設の交流と学びの会になっていくことを期待している。

四国支部



四国支部 松岡 智子
[松山ベテル病院 副看護部長]

四国支部交流会

2006年度の日本ホスピス緩和ケア協会年次大会は、八十八箇所お遍路さんの地四国で開催される事が決定されました。そこで、高知県の細木病院・もみのき病院・高知厚生病院・いずみの病院・函南病院、香川県の三豊総合病院、徳島県の近藤内科病院、そして愛媛県の松山ベテル病院合わせて109床のホスピス病棟のスタッフが力を合わせて、今年度の大会を思いで深いものにと考えております。

四国では、2003年度に徳島で日本死の臨床研究会が開催された際に、近藤内科病院にご準備いただき四国四県のホスピス病棟のスタッフに呼びかけ、第一回目の交流会を持ちました。その後、個々の交流も深まりつつあります。愛媛県では、1990年に愛媛ターミナルケア研究会が発足し、松山ベテル病院が事務局を務めております。2000年には、松山ベテル病院にホスピス病棟と難病病棟が開設され、在宅ホスピスケアの実践を続けてまいりました。1事例ずつ大切に関わらせていただきながら、力をつけているところであります。

知識・経験を深める為に他施設や多職種の参加を呼びかけ、在宅ホスピス勉強会やスピリチュアルケア勉強会を定期的開催し、交流を兼ねた勉強会を重ねております。

今年度からは、蒔いてきた種を実らせる為に続けてまいりました、地域の関連施設の方が参加するスピリチュアルケア勉強会や、在宅ホスピスケア勉強会を四国4県に呼びかけ、3月19日に第二回目の四国支部交流会を開催する運びとなりました。

内容は、いつものように事例紹介を中心に検討会を行う予定です。

四国四県のスタッフより、全国の皆様へ「おせたい」の精神を、伝えることができますように祈っております。





中国支部

中国支部 代表 末永 和之
[山口赤十字病院 緩和ケア科部長]

中国支部の立ち上げ

2005年7月9日の日本ホスピス緩和ケア協会年次大会のワークショップ「支部活動の推進」に基づいて、中国地区のA・B会員21施設中12施設が参加して中国支部設立を決定し、支部長、各県内施設連絡担当としての幹事を各県に1名ずつ決定しました。

「活動目標と活動計画」を決定しました。

長期：施設間の質の評価と補填

中期：職種別の研修（本部主催の全国セミナーを移行する形で、標準化したものを研修内容にする）

医療機能評価機構緩和ケアモジュールの相互評価

施設間での情報交換

事例検討の開催

診療所などへの入会勧誘

短期：STAS開催

第1回施設代表会議

平成17年11月27日（日）10：00～11：00に広島県緩和ケアセンターにて開催

施設数（A会員：16、B会員：6）中18施設参加

中国支部会則の決定、17年度支部活動助成金予算書の承認

役員（支部長、事務局、幹事、監査、会計）の承認

18年度はSTAS(Support Team Assessment Schedule)の継続研修を行うことを決定

次回施設代表者会議を平成18年4月に開催

中国支部ニュースレター発行などを決定

各施設間の問題点の情報交換を行う。

第1回研修会

平成17年11月27日（日）11：00～15：30に広島県緩和ケア支援センター2階研修室にて29名（各施設2名まで）の参加にて

安部まゆみ先生（広島県緩和ケア支援センター）、笹原朋世先生（東京大学看護学部）のもと、「STASスコアリングマニュアルについての研修」を行いました。参加メンバーは医師5名、看護師22名、MSW1名、その他1名でした。

九州支部

九州支部 代表 下稲葉 康之
[栄光病院副理事長・ホスピス長]



九州支部では、2005年5月14日（土）福岡国際会議場にて、36施設・185名の参加を得て2005年度九州支部総会を開催いたしました。今回は「日本ホスピス緩和ケア協会」に呼称変更し、「九州支部」に改まって初めての総会ということで協会会長である山崎章郎先生をお招きし、『日本ホスピス緩和ケア協会の現状と課題』と題して基調講演を頂きました。また、ホスピス・緩和ケア病棟の新規開設施設が年々増えている状況を踏まえ、教育・研修的な内容を盛り込みながら様々な職種の方々が情報交換し交流を深めあえるよう教育講演・職種別分科会といったプログラムを企画。教育講演では「症状コントロール」「家族への援助」「スピリチュアルケア」「病棟運営の諸問題」の4つのテーマにわかれて、職種別分科会では教育講演のテーマの一つである「病棟運営の諸問題」を各部会の共通テーマに掲げて、それぞれの職種ならではの

の視点で意見交換・討議を行いました。なおこの総会の模様は、11月発行の「九州支部ニューズレターVol.3」に報告としてまとめ、九州支部会員施設に配布しています。

九州支部では、年1度開催の支部総会を活動の大きな柱と位置づけ、それぞれの臨床現場で抱えている問題点や意識を共有しながら会員施設間の意見交換を行っていくことで、今後さらに地域のホスピスケア・緩和ケアの質の向上とその啓発を進めてまいりたい所存です。



シシリー・ソンドース博士追悼 — 記念講演とシンポジウム —

会 期 : 2006年2月26日(日) 13:30~16:30
会 場 : 笹川記念会館 国際ホール (東京都港区三田 3-12-12)

プログラム

講 演 : 「人間シシリー・ソンドース博士の贈り物」
尾崎 雄 (老・病・死を考える会世話人、医療・福祉ジャーナリスト)

記念講演 : 「私の人生を決めた人 —ソンドース—」
柏木 哲夫 ((財)日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団理事長、金城学院大学学長)

シンポジウム : 「シシリー・ソンドース博士から学ぶもの —ホスピスのこころ—」
座 長 : 志真 泰夫 (筑波メディカルセンター病院 緩和診療科 診療部長)
山崎 章郎 (日本ホスピス緩和ケア協会会長、聖ヨハネホスピスケア研究所所長)
シンポジスト : 柳田 邦男 (ノンフィクション作家)
季羽 倭文子 (ホスピスケア研究会顧問)
柏木 哲夫 (金城学院大学学長)



参加費 : 1,000円
定 員 : 800名 締め切り日 2月15日(水) 但し定員になり次第締め切ります
申込方法 : 往復はがきに下記項目を記入し、下記送付先までお申し込みください。
* 往信用 : 氏名、住所、所属、職種 (例 : 看護師)
* 復信用 : ご自身のあて名
送 付 先 : 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-8-8 第2 稲穂ビル 5F エルビーエス内
「シシリー・ソンドース博士追悼 — 記念講演とシンポジウム —」係
☆ 参加受付票 (返信はがき) は 2006年1月下旬に送付予定です。当日持参し、会場受付にて参加費をお支払いください。

